

## 保育者の専門性の発達に関する研究

### A study on the development of the professionalism of the nursery

尾野明美（小田原短期大学）・奥田訓子（小田原短期大学）・小湊真衣（田中教育研究所）

#### 問題と研究目的

女性の社会進出が進む中、子どもを預けて就労もしくは復職することを希望しても、保育士不足から希望する保育所に入所できない現状が社会問題となっている。保育士不足の原因としては、保育士の離職率の高さや人材確保の難しさなどが挙げられる。この離職率の高さによって、保育の現場では保育の専門性が確保できづらくなるという深刻な問題が発生している。現在、全国の保育所の施設長、主任を除く保育士の平均年齢は 26.7 歳であり<sup>1)</sup>、若い保育士の占める割合が高く、保育のスキルや保育の専門性が、経験の豊かな保育士から若手の保育士へ伝授されにくい現状がある。

一方、保育士養成課程の学生においても、現場で必要とされる保育スキルが十分に習得されていないことが指摘されている。特に保育所実習に参加した学生は、0 歳児クラスの保育で最も困ったと答える割合が多く、子どもとのかかわりやコミュニケーションの取り方に苦慮している実態がある<sup>2)</sup>。また、失敗経験をネガティブに捉える傾向のある学生は、物事がうまくいかない時にすぐ諦め、投げ出してしまいう傾向も指摘されており<sup>3)</sup>、実習が上手くいかない学生が保育資格取得意欲を喪失してしまうことも懸念される。これらのことから、保育士養成課程で身に付けるべき保育の専門性や、様々なスキルが身に付けていない状態で保育所実習に参加し、卒業後に現場に出ても、スキルアップやキャリアアップができないまま、様々な挫折を覚えて離職してしまうという、負のスパイラルが存在している可能性がある。

そこで本研究では、乳児保育スキルの定着が困難な要因を明らかにすることと、保育の専門性についての構成要素を明らかにすることとした。さらに得られたデータから、保育士の専門性の発達のプロセスを検討し、保育士としてのキャリア形成を支えるための保育士養成課程の教育内容の開発と、保育士を対象にした研修のプログラム開発に取り組むこととした。

#### 研究期間

平成 30 年 4 月から平成 31 年 2 月にかけて実施した。

#### 研究 1

##### 方法

首都圏の短期大学の保育者養成課程に在籍する学生 136 名（女性 136 名、男性 0 名、年齢 19.19 歳、SD=1.34）に質問紙式のアンケート調査を実施した。アンケートの内容は、①実習で最も困り感を覚えたクラスの子どもの年齢と困った内容、②学生の心理的特性（子どもと関わるための社会的スキル、社会的スキル、多次元「人間関係」保育者効力感尺度、レジリエンス）を尋ねる質問項目、の 4 つであった。①は自由記述式での回答を求めた。研究協力者には倫理的配慮を行い、短期大学倫理委員会に承認をえた。

##### 結果と考察

0 歳児クラスの実習に困ったと回答する学生が最も多く、子どもの年齢が上がるごとに漸次少なくなっている。一方、最も関心があったクラスに 2 歳児クラスを挙げている学生が最も多かった（図 1、2）。このことから、学生は 0、1 歳児クラスにおいて困り感を覚えているということと、0、1、2 歳児に興味関心を持っているという現状が明らかになった。

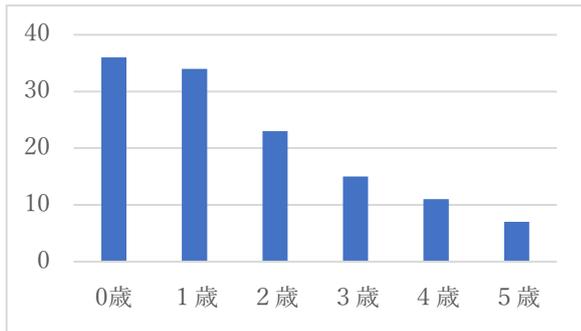


図1. 実習で困ったクラスの子どもの年齢

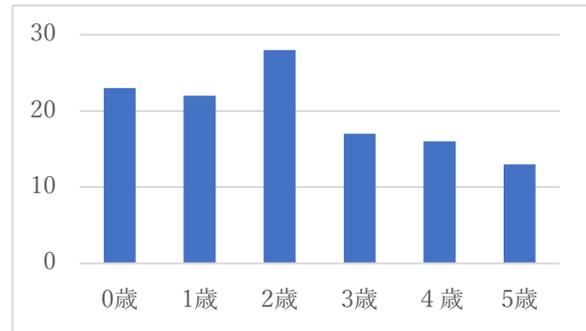


図2. 関心のあるクラスの年齢

0, 1歳児0歳児クラスの実習で困った内容の記述は43件（複数回答）あり、そのうち、ことばによる会話が成立しないこととかかわり方が分からない、子どもの気持ちを読み取ることができず対応に苦慮したなど、コミュニケーションの困難さに関連する記述が30件あった。一方、おむつ替えや衣服の着脱の援助の仕方など、生活援助における困難さに関連する記述は5件であった（表1）。

表1. 0歳児クラスの実習で困った内容と件数

会話が成立しないことなどによるかかわり方が分からない	13
コミュニケーションをうまく取れない	9
気持ちを理解できない	8
お着換え、おむつ替え、食事介助等の生活援助のやり方がうまくできない	5
人見知りの子どもへの対応	5
その他	3

次に乳児保育現場での困り感の有無による人間関係、保育者効力感、社会的スキルの得点を比較した。その結果、0, 1歳児クラスで困ったと回答した学生の方が、多次元「人間関係」、保育者効力感尺度の下位因子の「発達の視点で子どもを捉えて関わる」「基本的な生活習慣・態度を育てる」「関係性の広がりを支える」において得点が低かった。また、子どもとかかわるための社会的スキル尺度得点は、下位因子の「自己統制のスキル」において困ったと回答した学生の方の得点が低かった。これらのことから、乳児保育で困り感のある学生は人間関係全体を見渡すことや、関係性の構築が困難で、積極的な関わりや自己コントロールが苦手であることが明らかになった。

## 研究2

### 方法

首都圏の公立保育園に勤務する保育士8名（女性8名、男性0名、平均年齢41.63、SD=13.76）、北海道の事業所内保育園に勤務する保育士5名（女性5名、男性0名、平均年齢36.60、SD=16.70）を対象に、保育の専門性についての半構造化面接を実施した。調査に参加した保育士の勤務平均年数は、15.12年間（SD=13.67）であった。インタビューでは個室にて一人ずつ行い、インタビューの所要時間は一人あたり約30分であった。研究協力者には、倫理的配慮を行い、短期大学倫理委員会に承認を得た。

### 結果と考察

保育士との面接調査でICレコーダーに収録した会話を文字化したものを、カテゴリーに分類し、保育の専門性とその習得課程の概念図に表した（図3）。

得られた概念図は、Ⅰ保育のスキル（6カテゴリー）、Ⅱ感情（4カテゴリー）、Ⅲ経験（3カテゴリー）の3つ要素から成っていた。保育の専門性の基本は、「子どもが好き」という感情・感性であった。そこから子どもと関わる場で子どものお世話をする経験から、保育の勉強をする動機付けが成立

していた。実質的な保育の専門性は、保育の専門知識やスキルを、学校や職場などで学修し実践しながら、醸成されていた。保育の専門性の醸成のプロセスは、失敗体験や自分が母になるなどの経験を通して、ものごとを「客観視」し、現状に対しての「変化を受け入れる力」が強化され、さらに、知識・スキル学習を繰り返すことによって、例えば想像することや人間力などの「感性」が磨かれていくプロセスである。これらの習得プロセスの基礎となるのが、職業人としての基本的な態度である「社会勉強」であり、これらも仕事を通して強化されていた。最終的には自分で抱え込まず、同僚や先輩に相談しながら、様々な視点を介してチームで保育を行う「チーム保育」へと関連していた。以上の関連から、縦軸は保育の内容を基本から応用へ、横軸は保育の専門性を一般から高度へと内容とプロセスが示され、成育歴などに影響される要因とスキルの領域と働きながら醸成されるスキルの領域と開発が望まれるスキルの3つの領域で表されることが明らかになった。

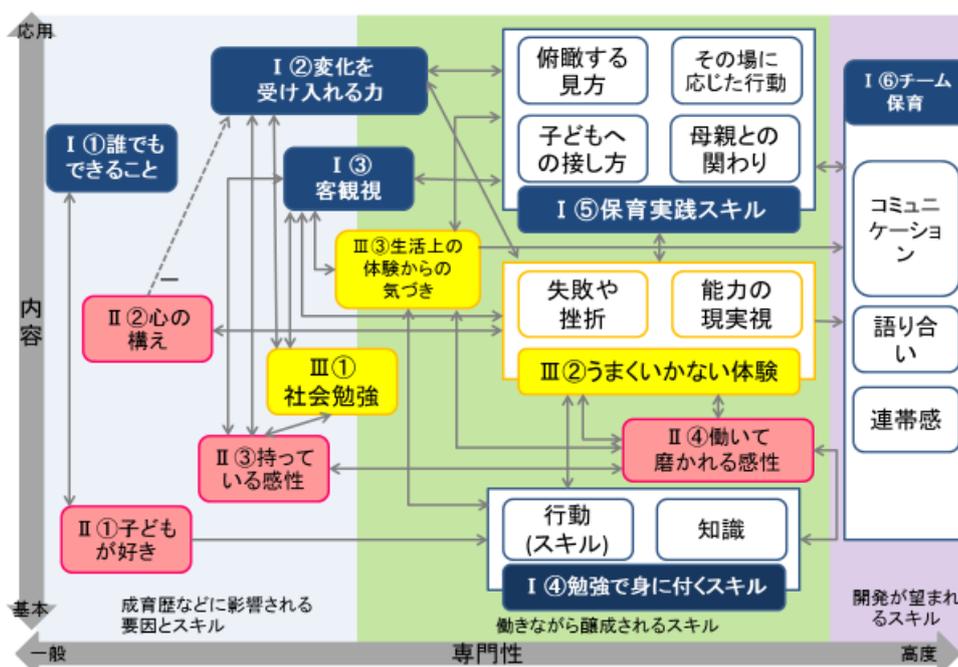


図3. 保育の専門性とその習得過程の概念図

### 総合考察（本年度の研究のまとめ）

本研究において、学生が子どもとの関わり方や乳児保育スキルに困り感があることが明らかになった。また、保育の専門性はもともとの素質から発展していくプロセスと、学びや経験を通して実践的なスキル獲得がなされるプロセスが明らかになった。

研究1の結果から、学生の今後の教育の課題は、ことばが成立しない0, 1歳児へのかかわりの仕方や、生活支援の仕方を身に付け、自信を持って実習や就職先に送り出すことの有効性が示された。この問題を解決するためには、0, 1, 2歳児の発育・発達の具体的な事例を用いた学習を進め、生活支援の仕方を丁寧に教授することが必要である。例えば、学生が困り感を表出した着替え、おむつ替え、食事の介助の仕方などの実践スキル演習で、乳児への関わり方を想定した授業内容の組み立てをし、スモールステップや社会的強化(ほめる、認める)の理論を援用したスキルアップを実感できるようなカリキュラムを検討することも有益だと考える。

また、0, 1歳児クラスで困り感があった学生は、子どもと関わる際に求められる社会的スキルの得点が低かったことから、子どもに関わる経験を増やすことも必要だろう。例えば、実習前に実際に子どもと関わる機会を増やすことを、授業に組み込むことが有益である。感情制御に相当する自己統制力にも弱さがみられたことから、感情をコントロールするような訓練を授業に組み込むことも有益だ

ろう。

保育の専門性の概念図からは、専門性の基となるのは、子どもが好きという思いや、誰でもできるようなスキルであった。しかし、保育現場では「子どもが好きだけでは保育士になれない」とよく言われる。それは、実際の仕事では、子どもと関わるだけでなく、保護者や保育士との関係構築が必要だからである。関係構築の過程では自分のやり方を批判されたり、他の人の言動に苛立ったりという自分の心の構えを自覚する体験をする。これらのことから、保育の専門性の習得課程は、実際の人間関係の中で自分をコントロールする方法を試行錯誤しながら、物事を客観的に見て、状況変化や人に応じて柔軟に対応する職業人としての基本的な態度が身につくというプロセスであることが示唆された。

言い換えれば、保育スキルのベースが整っていないなくても、働きながらベースとなるスキルを習得し、保育の専門性を醸成していくことも可能である。そこで鍵となるのが、仕事上の失敗経験をどのように乗り越えていくかである。上手くいかなかったときには、自分の心の構えと対峙しながら、自分の足りなさを省察し、知識・スキルを学び直す経験をする必要があるが、それは簡単ではない。保育士は相対的に経験年数が短い<sup>3)</sup>。早い時期に離職する者の中には、上手く保育できないことで疲弊し、結果的に仕事の意欲を喪失し、離職するようなケースも多いと考えられる。したがって、失敗経験を通して専門性を高めるような方略を検討することが望まれる。そこで注目するのが「チーム保育」というスキルである。「チーム保育」のスキルは、同僚間のコミュニケーションを活性化し、保育への思いや自分の状況を語り合い共感を得ながら、連帯感を強化するという内容であった。一方、福祉・教育現場では、問題解決スキルとしてケース会議等で活用されるスキルがある。いわゆるチーム支援である。これらのことから、保育現場でも、チーム保育スキルの内容を詳しく検討していくことで、自分の課題や、客観的な視点を磨く学習プロセスが確保できるようになるだけでなく、発達の課題を抱えた子どもや、課題を抱えた親、虐待等、困難事例に対応できる専門性が提示できるだろう。

### 今後の見通し

今回の一連の研究の結果から、保育士養成課程の学生の0, 1, 2歳の保育の課題が明らかにされ、今後必要とされる授業内容や授業展開についての示唆を得ることができた。また、保育の専門性の習得過程が示されたことにより、保育士の離職を防ぎ、各々がキャリアアップする上で開発が望まれるスキルの内容や関係性が明らかになり、保育所における研修の方向性を示すことができたといえるだろう。

今後は、研究結果を踏まえて、保育士養成課程の学生に対しては困り感の高い乳児保育のスキルを高めることをきっかけとして、保育へのモチベーションや自信を高めることを目的とした、保育の専門性を実感できる授業内容を検討する。現任者に対しては、実質的な保育スキルである「保育実践スキル」と「チーム保育」の内容をさらに分析し、スキルチェックリスト（研修の効果を測るための効果評価尺度）の作成を試みる。また、それらを効果的に習得できる研修プログラムの開発と、保育の専門性の獲得プロセスに対する理論的背景の立証も試みる。

### 参考文献

- 1) 全国保育協議会（2016）会員の実態調査報告書 2016年
- 2) 尾野明美・荒木みさこ（2018）乳児保育実践力構築の検討 日本発達心理学会第29回大会ポスター発表
- 3) 姜信善 清沢彩夏（2017）挫折経験のとらえ方が個人に及ぼす影響についての検討 富山大学人間発達科学部紀要 11(2) pp.1-11
- 4) 厚生労働省（2015）保育士等に関する関係資料